

夏期特別展「貝塚の野鳥」報告

西澤 真樹子・宮本 久美子（貝塚市立自然遊学館）

はじめに

自然遊学館では、市内の野鳥の生息状況を把握するため、定期的なルートセンサスを通じた生息調査を行っている。また、野鳥愛好家から寄せられる膨大な観察記録を整理し、保管している。観察記録だけでなく、自然遊学館には開館当時から現在に至るまで、市民の手によって多数の鳥類の遺体が標本として寄贈されている。ほとんどは交通事故や窓ガラスへの衝突、釣り糸や針の事故によるものである。寄贈された遺体は本剥製として常設展示に活用され、重複するものは学術標本として保管している。このような地道な標本収集と観察記録の蓄積により、貝塚市内で確認された野鳥は2007年の時点で178種となった。

情報や標本を寄贈していただいた方々への感謝を込め、野鳥に関心のある多くの市民に向けて、2007年の夏期特別展「貝塚の野鳥」を開催した。

開催期間と会場

展示会は自然遊学館、関空交流館、貝塚市山手地区公民館の3館を巡回しておこなわれた。



自然遊学館



関空交流館

2007年7月28日(土)～8月30日(木)

: 貝塚市立自然遊学館 多目的室

2007年9月1日(土)～10月28日(金)

: 関空交流館 一階ホール

2007年11月6日(火)～12月2日(日)

: 貝塚市立山手地区公民館 一階ロビー



山手地区公民館

展示の概要

会場は主に、鳥の生態、貝塚の野鳥の概要、生息環境を解説したパネル展示と生態写真、本剥製の展示で構成された。写真と剥製はヨシ原、ため池、河口、里山、奥山など、環境ごとの分布がわかるように並べた。ほかに、貝塚市内で見つかった鳥の古巣、骨格標本、羽の乾燥標本を展示した。鳥獣保護法で採集が禁止されているため野鳥そのものや卵は許可なく採集できないが、巣から落ちて死んだヒナや、何かの原因でかえらなかった卵、カラスなどが食べ捨てた殻を収集しており、その中から貝塚産のものを選んで展示した。比較のため、ニワトリとウズラの卵殻を作成し置いた。

会場の一角には「鳥文庫」と題した書籍閲覧コーナーを設けた。貝塚市在住で、府立泉南高校図書室勤務の鈴子佐幸氏に本の選定と解説を頂いた。子ども連れの来館者のために、鳥の折り紙を作ることができる体験コーナーを用意した。映像コーナーでは、自然遊学館わくわくクラブの石井葉子氏により、2006年9月から2007年7月にかけて主に貝塚市とその近郊で撮影、編集されたDVD「野鳥のくらしをみてみよう」を上映した。

会場の出口付近には、野鳥の置かれているさまざまな問題について啓発するため、雑誌や新聞記事を壁面に掲示し、閲覧できるようにした。繁殖期に巣から落ちたヒナを保護(=誘拐)する問題、釣り針の無責任な廃棄による誤飲や死亡事故、野鳥を餌付けする問題などを掲示した。特に国際的な問題となっているウグイスやメジロの密猟については、愛玩用ウグイス・メジロの違法飼育、密猟問題に取り組む「全国野鳥密猟対策連絡会」からの資料提供を受け、啓発パンフレットの配布とポスターの掲示を行った。



アオサギ剥製の周囲にヨシを展示



様々な卵殻



巣の乾燥標本

野鳥写真コンテスト



入賞作品：鈴木佐幸さん「そんなに近寄らないで」(左上)、五藤武史さん「コチドリの子」(左中)、中川文夫さんの「早春(メジロ)」(右上)

会場入り口では、「貝塚市内で撮影された野鳥」というテーマで撮影された写真を市民から募集し、自然遊学館での会期中に写真コンテストを開催した。会場入り口に展示された写真には撮影者のコメントと撮影場所などが記され、見学者の投票によって優秀作品が選ばれた。特別展終了後、入賞作品を最終会場である山手地区公民館に11月6日(火)～12月2日(日)にかけて展示し、結果を貝



会場入り口の展示コーナー

塚市広報および「自然遊学館だより」で発表した。

1位は、和泉葛城山での標識調査(野鳥の足に識別タグをつける調査)中に撮影した鈴木佐幸さんの「そんなに近寄らないで」、2位は近木川河口干潟で繁殖するヒナを撮影した五藤武史さんの「コチドリの子」、3位は枝にとまるかわいらしい姿を映した中川文夫さんの「早春(メジロ)」。作品は自然遊学館に保管されている。

展示から

1. 貝塚の鳥相の概要

貝塚市では、国の天然記念物に指定されている和泉葛城山のブナ林から近木川の河口まで多種多様な鳥類が記録されている。また、市内には300を越すため池が残されており、帰化種も含めると現在、貝塚市で一度でも見られたことのある鳥類は178種(※2007年7月時点)にのぼる。これは、大阪府で一度でも確認されたことのある鳥類334種の約53%になる。鳥類の区分では冬鳥がいちばん多く、つぎに留鳥、旅鳥、夏鳥、帰化種、迷鳥の順となる。留鳥及び夏鳥は主に貝塚市内を繁殖地として利用し、旅鳥・冬鳥・迷鳥は一時的に貝塚市を利用している。

2. 自然遊学館の野鳥調査

貝塚にどんな鳥たちがすんでいるのか調べるため、自然遊学館が主に和泉葛城山と近木川河口で行っている鳥類の調査を紹介した。

2-1：近木川河口の定期調査

毎月一回、自然遊学館から近木川河口の潮騒橋までのあらかじめ決めたルートを歩き、鳴き声や姿で鳥を見つけ、種類と数を記録している。

貝塚市を貫いて流れる近木川の河口には、小規模ながら大阪湾で激減している自然干潟が残され、水鳥、特に減少傾向にあるシギ・チドリ類の重要な休息地になっている。調査地ではオバシギや、キョウジョシギ、メダイチドリなどのシギ・チドリ類が観察され、大阪府レッドデータブックに挙げられているコアジサシやコチドリ、シロチドリ、オオタカなども確認された。干潟や海上にいる鳥は、望遠鏡をのぞきながらカウンターを使って数えた。定期的に観察することで季節ごとの鳥の変化を記録できる。調査結果は館内の掲示板で随時報告され、来館者に公開されている。

2-2：和泉葛城山での標識調査

和泉葛城山のブナ林では、センサス調査とあわせ、岸和田高校の中村進先生らとともにバンディング(※1)による標識調査をしている。大阪府レッドデータブックに挙げられているハチクマやミソサザイ、コルリなどが確認され、和泉葛城山は森林性の鳥類の貴重な繁殖地であると共に、旅鳥の中継地としても貴重な場所となっている。(※1：網をかけて鳥をつかまえ、足輪を付けて放すこと)

3：さまざまな環境で暮らす野鳥

さまざまな環境で暮らす野鳥を、環境ごとに紹介した。

ため池：クイナ、オオバン、カイツブリ、カワウ、コアジサシ、サギのなかまなど

草原・裸地：ケリ、ヒバリ、キジ、セッカ、コミミズク、コチドリ、シロチドリ、イカルチドリなど

市街地：ツバメ、スズメやドバト、ムクドリ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、キジバト、セグロセキレイ、メジロ、モズ、ジョウビタキなど

畑・水田：アマサギやコサギなどのサギ類、ケリ、

タゲリ、ツグミ、ムクドリ、カワラヒワ、スズメ、オオタカ、ノスリ、ミサゴ、トビ、ハイタカなど

里山：ウグイスやエナガ、コゲラ、ホオジロ、シジュウカラやヤマガラ、キセキレイ、カワガラス、ルリビタキ、スズメなど

和泉葛城山：オオアカゲラ、ミソサザイ、クロツグミ、ヒガラ、キビタキ、メボソムシクイ、マミチャジナイ、コルリ、ヒヨドリやサシバ、ツバメ類、クマタカ、オオタカ、ハチクマ、ハイタカ、ハヤブサ、サンショウクイなど

海上・河口：カルガモ、サギ類、シギやチドリ、カモ類やカモメ類、カンムリカイツブリ、ツクシガモ、ミサゴ、ハヤブサ、ホウロクシギ、コアジサシなど

ヨシ原：オオヨシキリ、セッカ、ツバメ、オオジュリン、アオジ、ウグイスなど



4. ボランティアに発見された貴重なツバメのねぐら

自然遊学館わくわくクラブのメンバーである石井葉子氏によって、2006年8月末に発見されたツバメの集団ねぐらは、貝塚の野鳥の動向を市民の観察により発見した好例である。

大阪南部のツバメの集団ねぐらについては、かつては岸和田市の七ツ池や流木今池、泉佐野市の奥池、十二谷池などにあることが確認されていたが、いずれも現在は使われておらず、ここ数年、集団ねぐらの所在は行方不明の状態にあった。発見された場所は貝塚市麻生中の唐間池南側にある小規模なヨシ原だが、発見後の観察によって数千羽のツバメが休息する貴重な池であることがあきらかになった。ヨシ原やため池そのものが少なくなっている現在、貝塚市のねぐらは市民みんなで守っていくべきかけがえのない財産といえる。会場ではこの発見の様子を石井氏に寄稿いただき、写真とパネルで紹介した。

まとめ

本展は自然遊学館収蔵の本剥製を中心に、古巣、卵、美しい生態写真をふんだんに用い、鳥たちの不思議で魅力的な生態にせまる初の展示会となった。鳥は、どんな人でも見られ、声を聞くことができる魅力的な野生動物だ。しかし、どんなところに、いつ、どんな鳥がいたのか、きちんと記録しておくためにはたいへんな根気と努力が必要である。この展示は、長い間地道に野鳥を観察してきた多くの方々の手で作られた。そして何よりも、野鳥の遺体を未来に残そうと考えた方々の意思が、標本という貴重な財産となって自然遊学館におさめられている様子を見ていただけたのではないかと思う。常設展でも鳥類の本剥製は展示されているが、企画展というストーリーを付すことによって、ひとつひとつの寄贈標本についてより詳しく解説できるだけでなく、市内の野鳥分布を紹介するきっかけになった。また、「野鳥の生息情報・遺体を収集している」という自然遊学館の博物館活動も普及できたのではと感じている。写真コンテストをおこなうことにより、ふだん来館されない写真好き・野鳥好きの方々を自然遊学館に引き込む結果にもなった。今後もこうした手法を蓄積し、市民にとって魅力ある企画展をたてて行きたい。

謝辞

本展の開催にむけて、市民の方々から写真や繁殖記録などの生息情報を募集したことで、最新データの充実を図ることができました。また、展示会の企画設営にいたるまで、多くの個人・団体にご協力を頂き、共同作業によって展示会を作り上げることができました。記してお礼申し上げます。

協力者（順不同）

（個人）：五藤武史さん、食野俊男さん、石井葉子さん、青木邦男さん、江本玲子さん、喜多理恵さん、鈴子佐幸さん、鈴子勝也さん、藤浦淳さん、松村勲さん、森本静子さん、谷真太郎さん、岩橋考祐さん、西川泰史さん（団体）：自然遊学館わくわくクラブ、全国野鳥密猟対策連絡会、大阪市立自然史博物館

参考文献

阿部直哉(1990)「野鳥」、家の光協会、270pp.

小海途銀次郎・和田岳(2003)「第23回実物日本の鳥の巣図鑑—小海途銀次郎コレクション展」、
大阪市立自然史博物館、49pp.

加藤夕佳・鈴木惟司(2001)オガサワラノスリの食性。「日本鳥学会2001年度大会講演要旨集」:28.

唐沢幸一(1976)モズのハヤニエの季節的消長。「鳥100(25)」:94-100.

叶内拓哉・阿部直哉・上田秀雄(1998)「山溪ハンディ図鑑7日本の野鳥」、山と溪谷社、623pp.

中城湾港泡瀬地区環境保全・創造検討委員会(2004)「第1回比屋根湿地・泡瀬地区海岸整備部門資料・
比屋根湿地・泡瀬地区海岸域の現状と課題等に関わる資料」、中城湾港泡瀬地区環境保全・創造
検討委員会、14pp.

中村進・宮本(石毛)久美子(2003)貝塚市の鳥相。「貝塚の自然」—貝塚市立自然遊学館創館10周年
記念号:186-195.

新村出編(1988)広辞苑. 2996pp.

日本鳥類保護連盟(1988)「鳥630図鑑」、財団法人日本鳥類保護連盟、394pp.

宮本久美子(2004)泉州生き物歳時記①モズのはやにえ。「自然遊学館だより」No.31:8.

渡辺朝一(1999)関東平野の水田におけるタゲリの採食地選択。「日本鳥学会1999年度大会講演集」:
82.

柳澤紀夫ら(2006)「入間市の野鳥Ⅲ」、入間市環境経済部みどりの課、187pp.

山岸哲(1981)「モズの嫁入り」、大日本出版、158pp.